



人間存在そのものが問われる!? AIに関する倫理問題

社会科学研究室室長

おのの まさひで
大野正英



近年、AI（人工知能）の活用によって社会はいつそう便利になる一方、深刻な問題を引き起こす可能性が指摘されています。

最も危惧されているのが、人間の労働に対する影響です。二〇一三年にオックスフォード大学の研究者が、米国において将来的に四七パーセントの職種で機械に代替される可能性があるとの研究を発表し、大きな反響を呼びました。代わりに新しい仕事が生まれるという楽観的な見方もありますが、AIは人間の知的活動を代替するため、高いスキルや経験が必要な仕事もその影響を免れません。ホワイトカラーの仕事も広く機

械に置き換えられ、会計士や弁護士などの知的な業務も例外ではありません。また、自動運転の普及により、運転手も大きく減少するとされています。全体として、高度な創造性やコミュニケーション能力が必要とされる一部の仕事と、自動化に適さない低スキルの仕事への二極化の予測が強くなっています。

大量の失業者が発生したときに、その収入と生活をいかに保障していくかが大きな問題となります。AIの導入によって社会に大量の富が生み出されますが、うまく分配できなければ、大きな格差と断絶を生むこととなります。

また、AIはいわゆるビッグデータを収集・分析することで、新しい知見を生み出しますが、収集される情報の取り扱いに関してプライバシーの問題が懸念されます。個人の多様な情報をAIに分析させ、能力や適性、信用度、将来の可能性に関する評価をする利用法が広がりつつあります。例えば、ローンの審査や従業員の採用、人事評価、病気のリスク評価、犯罪予測などへの利用です。

特に問題なのは、AIの判断が複雑すぎて人間が理解・検証できないという「ブラックボックス化」で、理由が不明確なまま個人の評価が下されかねません。

このほか、AIによる事故やトラブルの責任の所在、犯罪への利用、軍事利用など、さまざまな問題が懸念されていますが、根本的な問題として、「人間がAIをどこまで制御できるのか」が存在します。本来は人間を補助するために導入したはずが、いつのまにかAIが主で人間が従という事態が起きかねません。究極的には、理性に意味を見出してきた人間存在そのものが問われることとなります。

AI技術が急速に進歩する中で、人間社会との関係をどう構築していくかについて、倫理や道徳の視点からの議論が喫緊の課題となっています。